

# 心のバリアフリー

## パリで見つけた

1900年に開通したメトロに、古い石畳の街並み……。パリリンピックの舞台であるパリは、歴史ある街だ。大会にボランティアとして参加する日本人の視覚障害者が街を歩くと、駅のエレベーターの整備などに遅れを感じる一方、日本では見かけられることが少ない習慣に日々助けられている。

▼1面参照



選手村近くで白杖を手には歩く松木沙智子さん(右) 8月9日、パリ郊外サンドニ

### 視覚障害者 大会ボランティアに参加

福岡市在住の松木沙智子さん(44)は、五輪からボランティアとしてパリに1カ月以上滞在し、選手村などで日本選手団のサポートを担う。

#### 駅でも感じる差

先天性の「網膜色素変性症」という難病で、視野が徐々に狭くなる。いまは視野の中心だけが見えるが、暗い場所ではほ

んど見ええず、白杖が欠かせない。

パリを歩いて気づいたのが、バリアフリーの遅れだという。日本では「点字ブロックをたどって行けないところはない」。

一方、パリは「点字ブロックが少ない。横断歩道の手前も、どこで止まればいいのか分かりづらい」。

松木さんは「かすかに見えるため、日本では黄色い点字ブロックをたどる。パリの点字ブロックは黒や灰色など暗めの色が多く、道路に溶け込み、見えづらい」。

駅で差を感じるのにはホームドアだ。日本の都市部では設置が進むが、パリでは未整備の駅も多い。エレベーターが無い駅が多く、下りの階段で怖い思いをすることも。パリ交通公団によると、車いすに対応した地下鉄の駅は全体の1割にとどまる。

ただ、松木さんは日本には無い、「ソフト面のバリアフリー」を日々痛感しているという。

「横断歩道で待っていたり、駅で迷っていたりすると、必ず誰かが声をかけてくれる。『心のバリアフリー』を感じる場面は圧倒的に多いです」

アール医療専門職大学の徳田克己教授(バリアフリー論)は「物的な面でのバリアフリーは日本は相当進んでいます」と話す。ただ、フランスでは点字ブロックを景観に配慮しながら必要最小限に設置するなど、「障害者支援の文化が異なる」という。

徳田教授が重視するのは「困った時に誰かが声をかけてくれる文化」だ。「欧米では、学校などで、障害者への声のかけ方を学ぶ。日本では道徳の授業で『障害者も一

### 「点字ブロック少ないけど誰かが声かけてくれる」

生懸命生きている」といった精神論が中心。その差が表れている」と指摘する。

内閣府が毎年実施するバリアフリーに関する調査では、高齢者や障害者が困っている場合に「ほとんど手助けできていない」「手助けをしていない」「機会がなかった」が、2023年度は39%だった。理由は「かえって相手の迷惑になるといわ」が約4割に上り、「周囲に気を配る余裕がない」が21年度の20%から23年度は26%に、「自分以外のことに関心がない」が20%から24%に増えた。

#### 日本人ちぐはぐ

福祉の街づくりに詳しい東洋大の高橋儀平名誉教授は「東京パラリンピックを契機にハード面のバリアフリー化は大きく進んだが、日本人の意識面は追いついておらず、ちぐはぐなまま慌てて『心のバリアフリー』と言っている状況だ」と話す。その上で、「むしろ、『余計な厄介ごと』に関わらず、見て見ぬふりをするといった風潮が強まっているようにも感じる」と危惧する。(後藤遼太)



市中心部で複数路線が乗り入れるターミナル駅でも、階段のみでエスカレーターやエレベーターが無い場所が多い=8月12日、パリ